

2026年 2月

鹿鳴館の花は散らず

植松三十里

何気なく手に取った本だったのですが、幕末・明治維新のころの様子がわかり、楽しく読めました。公家というと華やかなイメージしか思い浮かばないのですが、陰ではイメージとは真逆の様子をうかがい知ることができました。特に女性はたいへんだったことが繊細に描かれていたのが印象的です。苦勞というのか、忍耐というのか、明治初期の日本人の考え方について考えさせられました。

この本には鹿鳴館が登場します。国賓や外国の外交官を接待するため、外国との社交場として使用されたものなのですが、そこにはどのような人が参加していたのか。主人公の榮子のように母であり我が子が熱を出して子供のそばにいてあげたいのに、国益のために笑顔で踊っていたようなことが改めてわかりました。また、会津の磐梯山が噴火したことをきっかけに幅広い人道的な活動が広まったこと。もちろんいずれにも榮子の活躍がものの見事に描かれています。さらに助けなければならない人がたくさん。でもそう簡単には物事は運ばない……。それでも榮子は……。まだまだ伝えたいことがあるのですが、まずはぜひ読んでみてください。

